特集歴史学

東南アジア史の時代区分

山　本　達　郎

はじめに

東南アジアという地域を一つにまとめて，その歴史を書くことができるかどうか。これについては多くの疑問がある。通常東南アジアとして数えられている10国――ビルマ・タイ・ラオス・カンボジア・ベトナム・マレイシア・シンガポール・インドネシア・ブルネイ・フィリピン――の歴史を一括して考えてみると，民族の系統も文化の種類も極めて多様で，世界の中で最も複雑な地域だということになる。言語の種類や系統が甚だ多く，インド文化，中国文化，イスラム文化の影響を受け，ポルトガル・スペイン・オランダ・イギリス・フランス・アメリカの政治的支配が及んだのであるから，歴史的にある時代，地理的にある区域を限って考えることが必要で，「東南アジアでは」として一般化して論議することは不可能な場合が多い。しかしそうは言っても，東南アジアの広い範囲に共通の文化要素や，不可分に結びついた歴史事象が見られることもまた明らかで，それは確かにインドとも違い，中国とも異る歴史の歩みを辿ってきた。東南アジアの全域に共通の歴史事象は少いとしても，ＡＢＣにはＸが共通，ＢＣＤにはＹが共通，ＣＤＥにはＺが共通というような種類の関連は少からずみられる。

もともと「東南アジア」という言葉が広く一般に使用されるようになったのは，第二次世界大戦以後のことである。もっとも，大戦以前，大戦中からこの言葉を使っていた学者もあったが，[1] この地方を日本軍が占領

した大戦の末期に，聯合軍の側で作戦地域の名称としてこれを用いたのが，戦後にそれが広く使用されるきっかけとなった。そして次第にこの地域をまとめて考える傾向が一般的になり，その歴史が書かれるようになったのである。

東南アジアと言っても，それぞれの国は，タイを除けば大戦以後に独立したもので，新しい国造りの過程で自国の歴史をまとめて書く必要があり，そのような著作が次第に現れるようになってきた。これら各国の“国史”も，各国の歴史をまとめて書いた東南アジア史も，その内容を検討してみると，当然のことながら，戦後の国際情勢やナショナリズムが顕著に姿を現している。個々の史実の取扱いばかりでなくて，全体としての構成や時代区分にもその影響が著しい。“国史”でもそうであるが，特に東南アジア史の場合は叙述の様式が種々様々であって，広く一般に承認された通史としての形態はまだ存在していないと言ってよい。この地域の歴史が組織的に研究されるようになったのは比較的に新しく，史実の解明が後れているところから，通史を書く場合に，思うままの推論を展開させる空白が残されているという事情もあるが，著作者の立場がいろいろあって，自分の属する国家・民族・社会・文化・階級などを中心とする視点から叙述を行っているものが多いところから，多様な通史が現れていることに注目しなければならない。私はこの一文においては，時代区分を中心として，東南アジアの全体をまとめた通史および各国の通史を比較して，著作者の立場と視角を明らかにすると共に，東南アジア史の時代区分としてはどのような構成が穏当で，広く受け入れられるものになるかを考えてみたい。

注

(1) Robert Heine-Geldern, „Südostasien." *Illustrierte Völkerkunde* (ed. Georg Buschan), II. Stuttgart 1923, pp. 689 ～ 968. R. Heine-Geldern, "L'art préboudhique de la Chine et de l'Asie du Sud-Est et son influence en Océanie." *Revue des Arts Asiatiques*, XI, 1937, pp. 177 ～ 206. 鹿野忠雄，「東南アジア民族学先史学研究」東京，1946. 本

書は戦後に出版されているが，序文は1944年に書かれ，序文ならびに同書に収録された論文五篇に東南亜細亜という語が題名或は副題として用いられている。

I　東南アジアの各国史にみえる時代区分

まず東南アジア各国の通史に注目すると，時代区分を重視してこれを明示しているものとそうでないものがあって，後者の場合はそれぞれの時期の重要だとみられる歴史的事件を取りあげ，比較的に多くの章節を設けて叙述するのが普通であるが，その場合でも内容を検討してみれば，著者が時代を分けている考え方の枠組みを見出すことは困難でない。ここでは各種の通史の形態を網羅するのが目的ではないので，著しい特徴の認められる事例だけを取り上げて行くこととしたい。

第一に問題としたいのはインドネシアの場合である。第二次大戦直前の頃から最近に至るまでに，どのような変化が見られるであろうか。もともとインドネシアという名称は，学術用語としては西暦1850年から用いられ，政治用語としては1922年頃から使用されるようになったが，[1] その地は第二次世界大戦までは，オランダの支配下にあったから，これを“オランダ領インド”(Nederlandsch-Indië),或は“オランダ領東インド”(Nederlandsch Oost-Indië)と呼ぶのが普通であった。大戦の頃までに出版されたこの地域を扱った通史として最も大きくまとまった書物は，F.W.Stapelが編纂した蘭領インド史 *Geschiednis van Nederlandsch Indië*,Amsterdam,Joost van den Vondel. 1938—40 であるが，同書の各巻の編成は次のようになっている。

Deel I.　A. Praehistorie.
　　B. De Hindoe-Javaansche Tijd.
　　C. De Verbreiding van den Islam.
Deel II.　A. Javaansche Geschiedschrijving.
　　B. Portugeezen en Spanjaarden.
　　C. Franschen en Engelschen.

D. De Nederlandsche Voorcompagnieën.
Deel III. A. De Oprichting der Vereenigde Oostindische Compagnie.
B. De Nederl. Oostindische Compagnie in de Zeventiende Eeuw.
Deel IV. De Nederl. Oostindische Compagnie in de Achttiende Eeuw.
Deel V. A. De Bataafsche Republiek en de Fransche Tijd.
B. Het Engelsche Tusschenbestuur.
C. Het Koninkrijk der Nederlanden.
(Deel VI. De Moderne Tijd en zijn uitingen in Indië.)

最後の近代史を扱う第六部は大戦のために刊行されなかったようであるが，全体の編成をみると，それがヨーロッパ人としてのオランダ人の立場から，それも東インド会社を中心として，書かれていることは明らかである。第一部で先史時代，ヒンドゥージャワの時代，イスラムの流布を扱い，第二部ではジャワの歴史叙述に触れてから，ポルトガル人，スペイン人，フランス人，イギリス人，オランダ初期の商社活動について述べ，第三部で統一東インド会社の設立と17世紀におけるその活動を記述し，第四部では専ら18世紀の間のこの会社の活動だけを述べ，第五部でフランス革命の時代におこった，バタビア共和国とフランス，ラフルスがジャワを統治した中間的な支配時代を経て，再びオランダの統治が王国の名の下に進められた状況を叙述している。

この書物とは別に一人の著者によってまとめられた E.S.de Klerck, *History of the Netherlands East Indies*, 2vols. Rotterdam, W.L. &J.Brusse, 1938や Bernard H.M. Vlekke, *Nusantara-A History of East Indian Archipelago*. Cambridge Mass. Harvard University Press. 1943は，明確な時代区分線を示さずに全体を多くの章に分けており，――前者は2冊で16章と23章，計39章，後者は1冊で16章，――互に多くの出入はあるが，大局からみれば"客観的"な叙述を試みながら，やはりオランダからみた情勢の把握が基調をなしていると言わなければならない。尤もこのような叙述となるについては，オランダ側に利用できる厖大な量の文献があり，インドネシア側には記録が乏しく研究も少な

かったところから，確実な史料に基いて17世紀以後を論述しようとすれば，知らず知らずに，或は止むを得ず，オランダ的な見方を採用することになるという事情があったことを十分に考慮しておく必要がある。そしてここにあげた二つの本が何れも太平洋戦争の時期，或はそれ以前に書かれたものであることを注意しなければならない。de Klerckの書物はドイツがオランダを占領する二年前の1938年に出版されており，Vlekkeの本は日本が太平洋戦争に突入した前後，1941・1942年に書かれて戦時中1943年に出版されているのである。後者が書名としたNusantaraというのは本来はジャワ語で"他の島々"を指す言葉であったが，教育運動Taman Siswa(子供の庭)の指導者Ki Hadjar Dewantoroがこれを使用し，[2] 戦後にわたって時にインドネシアと略同じ範囲を示すものと考えられた。Vlekkeはその著作の意図を"インドネシア文明"の発展と三百年に及ぶオランダの"マレー世界"に対する影響を研究する入門のためであると言っているが，Nusantaraを書名としたのは，戦時においてインドネシアの立場を重視する態度を表明したと言ってよいのではあるまいか。

しかしながら戦後にインドネシアが独立してインドネシア人が自国の歴史を書こうということになると，全く新しい構想が現れて来る。歴史家であると同時に政治家であったH. Muhammed Yaminは1957にミュンヘンで開かれた第24回国際東洋学者会議で，インドネシア史を5つの時代に区分する構想を発表した。彼はまず西ヨーロッパ中心に考えられた古代・中世・近世という三時代区分法が，普遍的に妥当するものでないことを指摘した上で，新しい時代区分を提唱したのであるが，彼がPantjawarsa(5つの時代)と呼ぶのは次のような内容を持っていた。[3]

1. die Vorgeschichte Indonesiens
   Die Vorgeschichte Indonesiens reicht von den Anfängen der astronomischen und geologischen Erdgeschichte bis in die Zeit von Christi Geburt.
2. die Frühgeschichte Indonesiens
   Die Frühgeschichte Indonesiens erstreckt sich vom Ende der

ersten Epoche bis zum Ende des V. Jahrhunderts.

3. die Einzel-Völkische Zeit
   Die Zeit der Völkisch-Indonesischen Einheitsreiche Seriwidjaja und Madjapahit dauert etwa rund 1000 Jahre, von 500 bis 1525.
4. die Zwischen-Völkische Zeit
   Die Zwischen-Völkische Zeit von 1525 bis 1900 umfasst die Zeit der Begegnung des Indonesischen Volkes mit anderen Völkern.
5. die Epoche der Proklamation
   Die Epoche der Proklamation schliesslich beginnt mit dem XX. Jahrhundert; aber die Proklamation der Freiheit ist nicht zugleich auch der Abschluss der Freiheitsbewegung.

この構成は既述のヨーロッパ人の著作とは根本的に異質である。第1の西暦紀元以前を扱う先史時代が，太古の地質学的年代から始まっているのは，人類の起源を考える場合に重要な意味を持つ猿人の頭骨や旧石器の類が，ジャワから発見されていることが内容となるわけで，それはインドネシア史の起源を特別に古いものとすることによって，新しいナショナリズムに直結するものと認められる。第2の古代を間において，第3の時代でインドネシア民族が個別にシュリーヴィジャヤやマジャパイトの国を建てて活動した状況を取扱い，そのあとにこの民族と他の民族との出遇いを扱う第4の時代を設けている。‘植民’という言葉を用いず，支配・被支配の関係を示す用語を排除して，“民族間”の出遇いという表現を用いているのは頗る特色的である。そして最後の第5の時代が，インドネシアが自由を宣言し，独立国として発展するようになる20世紀に当っている。このYaminの時代区分は，一見して明瞭なように，新興国としてのインドネシアの誇り高い国民の態度を表明したものである。併しこれだけでは具体的にどのような歴史を書くことが出来るのか，必ずしも内容が明らかでない。殊に第2の西暦紀元の初の頃から6世紀の終までの歴史として，どれだけの史実を記すことが出来るのか。現在知られているところはまことに乏しい。[4] 実際にこの時代区分によってインドネシア史が書かれたかどうか私は知らないが，恐らく書かれなかったの

ではないであろうか。

そこで今度はインドネシアで実際にどのような歴史が書かれているかを示すために，Sejarah Nasional Indonesia, Jakarta, Balai Pustaka, 1977を取上げてみる。同書の内容は6つの時代に分かれ，それぞれに別々の編纂者があって，現在のインドネシアの指導的な歴史家達がこれを分担している。各時代の名称と分担者の名前を掲げると次の如くである。[5]

1. Jaman Prasejarah di Indonesia (ed. R. P. Soejono), インドネシアにおける先史時代。
2. Jaman Kuno (ed. Bambang Sumadio), 古代。
3. Jaman Pertumbuhan dan Perkembangan Kerajaan Islam di Indonesia (±1600 − ±1800) (ed. Uka Tjandrasasmita), インドネシアにおけるイスラム王国の勃興と発展。
4. Abad Kesembilanblas (±1800 − 1900) (ed. F. A. Sutjipto), 19世紀。
5. Jaman Kebangkitan Nasional dan Masa Akhir Hindia Belanda (±1900 − 1942) (ed. Sartono Kartodirdjo),. 民族〔主義〕興隆の時代と蘭領インドの終焉期。
6. Jaman Japan dan Jaman Republik Indonesia (ed. Nugroho Notosusanto), 日本時代とインドネシア共和国時代。

この中の第2の時代では，インド文化をとり入れて活動したシュリーヴィジャヤ，マジャパイトなどの国々の活動が述べられており，その前にYaminの第2の時代に当る区分は特別に設けられていない。Yaminとは異って，イスラム王国の時代を独立に設けているのは特に注目すべきで，その中にオランダが活動した17・18世紀の叙述が含まれているのである。そしてその次が19世紀という題で，オランダ支配下の“強制栽培”とか帝国主義の年代がこの中に含まれてしまう。第5の中に蘭領インドの終焉という言葉はみえるが，オランダの支配とか植民地とかいう表現はどこにも現れていない。最後の第6部に‘日本時代’の名称がみえるのにも注目すべきであろう。日本の占領時代は4年に足りない短い期間であったが，インドネシアの歴史の大きな転換期として注目されているのである。全巻を通じて，独立国としてのインドネシアの立場が強く表明されたものとなっているが，史料としては今でも多くのオランダの文献を

使用しなければならないから，そこにインドネシアの見地だけから一貫した叙述を行い得ない個所が出来る場合のあることを念頭に置くべきであろう。

以上インドネシアの事例を見てきたが，太平洋戦争を境として歴史叙述が大きく変り，ヨーロッパ人の書いた歴史とは全く異って東南アジアの人々の立場に立った史書が現れているのである。その他の東南アジアの国々で書かれた通史の類を，いちいち問題とすることは出来ないが，ここでもう一つ，叙述の形式が著しく異ったベトナムの事例を掲げることとしたい。ベトナムの通史としては1959年，1960年に大部な Lịch sử Việt-nam (越南歴史)，Hà-nội, Nhà Xuất Bản Giáo Dục (教育出版社) から発行されているが，その編成は次の如くである。

I　Lịch sử Chế độ Cộng sản nguyên thủy ở Việt-nam, 越南における原始共産制度の歴史(1960)

II　Lịch sử Chế độ Phong kiến Việt-nam, 越南封建制度の歴史。

1集．紀元前2世紀から15世紀初頭まで(1960)。

2集．15世紀初頭から16世紀初頭まで(1959)。

3集．16世紀初頭から19世紀の中葉まで(1960)。

III　Lịch sử Cận đại Việt-nam, 越南近代の歴史。

1集．1858～1873(1960)

2集．1874～1898(未見)

3集．1899～1919(未見)

このベトナムの通史において第一に注目されるのは，大きな枠組みとしてマルクスの発展段階説が用いられていることである。共産主義の国としてマルクスの歴史観が公認されており，通史はこれによって書かれたものと認められるが，特に興味深いのは原始共産制度の次が封建制度の時代で，後者の期間が極めて長く，紀元前2世紀から19世紀の中葉にまで及んでいる点である。マルクスの発展段階説をとるとすれば，原始共

産制度の次には古代奴隷制度が来る筈であるが，この書物にはそれが見当らない。これは本来西洋の歴史を主眼として組み立てられたこの段階説が，世界中どこでも当てはまるものでなく，ベトナムの歴史において古代奴隷制度と呼ぶべき特色のある時代を設定できないところから，これを落としたものと見なければならない。実際にこのような史実を見出すことは不可能であろう。そして一方でフランスの勢力の侵入以後を，資本主義の名を用いないで近代と名付け，その前を総べて封建制度という名称で総括したところから，1000年にも及んで中国がベトナムを従属させていた時代も，ベトナムが独立国を形成して李朝・陳朝・黎朝が支配した時代も，阮朝の中期に至るまでも，ひとまとめに扱うこととなったのである。王朝によって時代を区切っていないことはよいとしても，この枠組みの嵌め方には無理がある。新興の独立国が自国の歴史をまとめるのに理想的な時代区分を設けても，史実がそれに当て嵌まらないという意味で，内容的には全く異質ではあるけれども，前述のYaminの時代区分の場合と比べるとそこに一脈相通ずるものが見出されると言ってよかろう。

このように見て来ると，東南アジアの国々の"国史"には，全く異った立場や視角に基く各種各様の構成や時代区分の存在することが知られるのであるが，それではこれらの国々を包括した東南アジア史の時代区分は，どのようになっているであろうか。

注

(1) 永積昭「東インドからインドネシアへ」『山本博士還暦記念東洋史論叢』，東京，山川出版社，1972. pp. 327～338.

(2) Theodore G. Th. Pigeaud, *Java in the 14th Century. A Study in Cultural History*, vol. 5, The Hague, Martinus Nijhoff, 1963, p. 139, nūṣāntara. Bernard H. M. Vlekke, *Nusantara – A History of East Indian Archipelago.* Cambridge Mass. Harvard University Press, 1943, Preface p. v. pp. 354 ～ 356.

(3) H. Muhammed Yamin, „Gliederung der Geschichte Indonesiens in fünf Epochen", *Akten des Vierundzwanzigsten Internationalen Orientalisten-Kongresses, München,* herausgegeben von Herbert

Franke. Wiesbaden, Deutshe Morgenländische Gesellschaft, 1959, pp. 693 ～ 696. ここでは同氏が学会で配布した資料による。

(4) 1957年にYamin氏の研究発表が行われた際に，私はこの第2の時代に含まれる内容について質問したが，満足すべき回答を得ることが出来なかった。

(5) Sejarah Nasional Indonesiaについては，仲田浩三氏の蔵書を借覧し，同氏から御教示を得た。ここに仲田氏に対して感謝の意を表する。

II　既刊の「東南アジア史」にみえる時代区分

東南アジアをまとめた通史として早期に書かれた著作としては，Brian Harrison, *Southeast Asia, A Short History,* London, Macmillan, 1954[1]とD.G.E.Hall, *A History of South-East Asia,* London, Macmillan,1955があり，何れも広く読まれた。Harrisonの本には時代の区分は明示されておらず，全体を18章に分けているが，各章の表題を掲げると次の如くである。

1. The Human Texture of South-east Asia.
2. Early Chinese and Indian Influences.
3. Early Indianized States: Funan and Srivijaya.
4. Indianized States of the Indo-Chinese Peninsula.
5. Indianized States of Sumatra and Java.
6. The Coming of Islam.
7. The Coming of the West.
8. The Portuguese Century.
9. Dutch and English Beginnings.
10. European Company Trade in the Seventeenth Century.
11. Commerce and Conflict in the Eighteenth Century.
12. The Shaping of a New Balance of Power.
13. The Advance of British and Dutch Interests.
14. The Beginning of the New Colonialism.
15. Capital and Development.
16. Population and Welfare.
17. The Growth of Nationalism.
18. New Nations of South-east Asia.

これによって東南アジア史に盛り込まれている内容の概略を知ることができよう。西洋人の渡来が第7章で，それ以下終りまでが章の数で言えば3分の2であるが，頁数からみると4分の3以上になっている。

Hallの著書の方は，全体を4部に時代区分して，総計で45章を設け，章によっては更にその中が細分されている。ここでは章の名称の総べてを列挙することは省略して，4つの Part の名称とそれぞれに含まれている章の番号を掲げることにする。

Part I The Pre-European Period (chapters 1～11)
Part II South-East Asia during the Earlier Phase of European Expansion (chapters 12～24)
Part III The Period of European Territorial Expansion (chapters 25～37)
Part IV Nationalism and the Challenge to European Domination (chapters 38～45)

この本は当初はフィリピンを含めてなかったが，第2版(1964)，第3版(1968)と増補改訂するに際して，これを扱うようになっている。そして第2版からは Part Ⅰの表題が“To the Beginning of the Sixteenth Century”と改められた。増補された第3版は本文912頁の大冊となっているが，各版ともに頁数の配分をみると第1部が4分の1強となっている。それにしても，この本の各部の名称は甚だ特色的で，何れもヨーロッパという見地から命名した形態をとっている。第1部はヨーロッパ人の活動する以前，第2部・第3部がヨーロッパ人の活躍した時代，第4部がヨーロッパ人の支配に対する挑戦なのである。Hall教授は東南アジアの事情によく通じた碩学で，東南アジア史研究の先駆者でもあり指導者でもあって，この著書は東南アジア史を学ぶ者のいわば必読の書となっているのであるが，その本の構成において，このようにヨーロッパの見地からする時代区分が用いられていることに注目しなければならない点である。

そこで今度はヨーロッパ人ではなくて，東南アジア出身の人が書いた東南アジア史として Lê Thành Khôi, *Histoire de l'Asie du Sudest.* 〈Que sais-je?〉No.804, Paris, Presses Universitaires de France, 1959.[2] 章別編成を取りあげてみたい。

Bhinneka Tunggal Ika

chapitre Premier. – L'Antiquité
Les cultures primitives, – Arrivée de la Chine et de l'Inde, – Le Fou Nan, – Le Champa, – Les royaumes malais.

ch. II – Les Empires de l'archipel
L'empire sumatranais de Çrîvijaya, – L'essor de Java, – L'arrivée de l'Islam, – l'Indonésie islamique.

ch. III – Apogée et déclin des Khmers
Les débuts du Cambodge, – La floraison Angkorienne, – La décadence.

ch. IV – Le "Nam Tiên" vietnamien
La fondation du Viêt-Nam, – Consolidation et crises de la monarchie, – La marche ver le Sud, – Absolutisme et immobilisme.

ch. V – L'unification de la Birmanie
Les Pyu et les Môn, – Le royaume de Pagan, – La période de morcellement, – La Birmanie moderne.

ch. VI – L'essor Thai
Les premiers royaumes du Ménam, – D'Ayuthya à Bangkok, – Le Lan Chang.

ch. VII – La fin de l'Ancien Régime
Le déclin de la société – La fin des royaumes indonésiens, – La chute des monarchies continentales.

ch. VIII – La Renaissance nationale
Les dernières résistances, – L'éveil du nationalisme, – De la crise mondiale à la guerre du Pacifique.

ch. IX – L'édification des Etats nouveaux
La Thaïlande, – La République des Philippines, – L'Union birmane, – La République d'Indonésie, – Le Viêt-Nam, – Le Cambodge et le Laos, – La Malaisie, – Problèmes généraux.

この本の内容は前に掲げたHarrison, Hall両氏の著書と比較するとまことに対照的である。はじめに，古いジャワ語で多様性の中の単一性を意味する言葉を引用し，本文を9章に分けているが，はじめから第6章までは古くから続いた東南アジア諸国の活動を述べたもので，ヨーロッパ人の活動については第7章に含まれることになるが，章節の名称には全く西洋の国名もヨーロッパという単語も現れず，東南アジアの国を中心としてその衰退が記述されている。特に注目されるのは第7章が"旧体制の終末"で，それに続く第8章が"国の再生"としてナショナリズムの展開

から太平洋戦争までを扱い，最後の9章が“新しい国々の建設”となっていて，植民地時代というものが全く現れないことである。これはHarrison, Hall両氏の本のほか，前に掲げたヨーロッパ人の手になるインドネシア史と比べると極端に異った編成で，ヨーロッパ中心の見方を転倒させている。そこには前に掲げたYaminの見解と通じるものがあって，‘東南アジア人’としての立場が明らかに表明されている。Khôi氏はパリ大学の教授として歴史学のほか経済学にも政治学にも通じており，この東南アジア史をフランス語で書いているにも拘らず，ベトナム出身の同氏の本が，このように東南アジア中心の立場を取っていることは特に注意しておく必要がある。

そこで，ここにもう一つ，中国人の著作を取上げておきたい。呉俊才『東南亜史』(現代国民基本知識叢書，四)，台北，中華文化出版事業委員会，1956，をみると，同書は次のように編成されている。

第一篇　緒論
第二篇　十三世紀以前的東南亞
第三篇　元明兩朝與東南亜
第四篇　西方殖民勢力的興起
第五篇　西方殖民勢力的擴張
第六篇　東南亞被壓迫民族的覚醒
第七篇　東南亞諸国贏得独立與自由
第八篇　華僑在東南亞的発展

この本は緒論を除いて頁数で数えてみると，西方殖民勢力の発展より前とそれ以後との比率が略1対4であって，西方勢力の活動と植民地支配からの独立の過程に相当の頁数を割いており，また他の著作には見られない元明両朝の東南アジアとの関係や，華僑の発展についてそれぞれ独立の一篇が費されている。そこには中国人の視角が明らかに現れているが，東南アジアの国々にはそれぞれ支配的な地位にある別の民族があり，曽てこれを植民地として支配した西洋の国々も地域によって異っている

に拘らず，華僑だけはどの国にも居住しており，経済的に活発な動きを続けて来たのであって，華僑という共通項を求めて東南アジアを把握する視点が存在することを忘れてはなるまい。

以上によって明かなように，ヨーロッパ人，東南アジア人，中国人の書いた東南アジア史にはそれぞれの著者が属する文化や民族の立場が強く現れているが，その他の西洋人の書いた東南アジア史にもまた別種の型があるので，ここにその二三を取りあげて比較してみよう。John F. Cady, *Southeast Asia, its Historical Development.* New York, McGraw-Hill, 1964 は全体を 5 部26章に分けているが，各部の名称とそれぞれに含まれている章の番号だけを列記すると次のようである。

Part I Setting (chapters 1, 2)
Part II Early Empires (chapters 3 ～ 6)
Part III Transition to Modern Times (chapters 7 ～ 9)
Part IV European Commercial Dominance (chapters 10 ～ 15)
Part V Intensive Economic Development (chapters 16 ～ 19)
Part VI Political Reform and Nationalist Revival (chapters 20 ～ 26)

ここに見られる時代区分の中で著しく特色のあるのは"近代への移行"を扱った第 3 部であって，その中に 3 つの章 "7. Mongol Intervention, Thai Hegemony, and Majapahit Java", "8. Muslim Malacca: History, Trade, Islamization Process", "9. The Sixteenth Century Portuguese Intrusion, Towngoo Burma and Siam" が含まれており，それは13世紀から16世紀にわたり，ポルトガルの活動を含めて'近代'に向う転換期としてまとめられている。

Cadyの本の翌年に出版された Milton W.Mayer, *Southeast Asia: A Brief History,* Totowa N.J.Littlefield, Adams,1965は全体が8編に分かれて，次のようになっている。

I Introducing Southeast Asia
II Traditional Southeast Asia (to 1500)
III Southeast Asia and the West (1): Colonial Rise (1500～1900)
IV Southeast Asia and the West (2): Colonial Decline (1900～1945)

V Postwar Mainland Southeast Asia (1): Thailand, Burma and Malaysia
VI Postwar Mainland Southeast Asia (2): The Indochinese Succession
VII Postwar Insular Southeast Asia: Philippines and Indonesia
VIII Problems of Independence

この本は戦後の現代史に重点が置かれていて，序説を除くと1500年以前は全体(214頁)の中で僅か10頁に過ぎず，地図や表を加えてみても17頁，全体の12分の1に達しない。それはポルトガル人の渡来が切れ目になっており，西洋諸国の活動の顕著だった時期を，その後19世紀の末までひとまとめにしているのが著しい特色である。Cady の本も Mayer の本もアメリカで書かれ，出版されていることを留意しておくことが必要であろう。

Mayerの著書の更に翌年に出た Nicholas Tarling, *A Concise History of Southeast Asia,* New York, Frederick A.Praeger, 1966 は全体を3部に分け，その第2部を更に2編に分轄しているが，これらの名称とそれぞれの中に含まれている章の数を列挙すると次の如くである。

Part 1 Southeast Asia to about 1760 (12 chapters)
Part 2 Southeast Asia, 1760～1942
Section A The creation of colonial framework (8 ch.)
Section B Nationalism and Communalism (8 ch.)
Part 3 Southeast Asia Since 1942 (10 ch.)

この本の特色は18世紀の60年代を大きな時代の切れ目としていることで，それ以後は太平洋戦争の開始を大きく取りあげており，その中間は更に19世紀の中葉あたりで二つに細分されている。著者は序論においてその立場を説明し，ヨーロッパ中心の年代観や用語を斥けると同時に，極端な反植民地の見方('anti-colonial' extreme)に陥ることを避けて，東南アジア史のより広い理解を進めようと試みたものと言っており，著者をふくめてオーストラリア人，ニュージーランド人は自分の歴史を"辺境的な表現"(frontier terms)で取扱う傾きがあるが，東南アジアの歴史は

それよりも複雑であるといっても，外部からの色々な影響と与えられた諸条件の交互作用を評価できるような枠組みを作って，辺境地域としての一書として著作したいという意味を含めた説明を行っている。[3] これは欧米とも異って，オーストラリア・ニュージーランドの歴史の見方を或る程度意図的に取入れながら，時代区分を行っているのである。

このように見てくると，ヨーロッパ，東南アジア，中国のみならず，アメリカ，オーストラリア・ニュージーランドの著作にも，それぞれの立場や持ち味が現れていることを明かに指摘することが出来るであろう。それは前述の東南アジアのそれぞれの国の歴史の場合とも類似した特徴を示している。東南アジアの歴史家が東南アジアにおいて書き上げた東南アジア史はまだ見当らないが，現在この地域の多くの国々が協力して，東南アジアの歴史を書く仕事が進められているので，余り遠くない将来にその内容が発表されることを待望するものである。

注

(1) 同書には邦訳がある。ハリソン著，竹村正子訳，東京，みすず書房，1967年。
(2) 同書には邦訳がある。レイ・タン・コイ 著，『東南アジア史』，東京，白水社，1970年。
(3) N. Tarling, *A Concise History of Southeast Asia*, 1966, pp. xii～xvi.

III　時代区分の一つの試み

以上これまでに出版された各種の"東南アジア史"について，その構成と時代区分の立て方を見てきたが，叙述の形態はまちまちで，そこに著者の属する民族・国家・社会・文化を中心とした異った視点が現れており，広く一般に認められた時代区分は存在しないという状況である。西欧の歴史を中心とした時代区分やそれに関連する用語をそのまま当てはめることができないことは確かであるし，東南アジアの文化事象が多様であって，共通の特徴でまとめることに困難があり，ある年代をとって一貫した変動の現象を見出すことが出来にくいところから，通史を書く場合にも時代区分を殊更に立てないで叙述する試みも行われている。併

しながらそのような場合でも，具体的に叙述の内容を見て行くと，それと表明しないでも，著者は何等かの視点から，ある種類の基準を立てて歴史の流れを辿っているのを認めることができる。もともと極めて古い時代から現代までの通史を書くということは，時代を区分する考え方なしでは不可能な筈である。

アジアの歴史を取扱う研究者の間には時に時代区分の問題を重要視しない人々もあるが，それには基準の立て方が困難だという場合もあり，史実が解明されていないために立論が不可能であるという場合もあると同時に，未来に向って歴史が流れて行く大きな動きに関心を向けないという場合がある。新しい国造りに精進し，社会経済の革新に努力している国々にあっては，歴史，特に自国の歴史を，発展の姿において把えるのが普通で，共産圏の国々がそうであるばかりでなくて，殆んどあらゆる新興国の場合にそれが見られると言ってよい。ヨーロッパのアジア研究者の間に時代区分の論議は無意味だと考える人があるのは，大部分のアジアの歴史家の間に寧ろ不可解にさえ見えるであろう。新興の国々や，東南アジアのように，新しく一つにまとめて把握されるようになった地域の歴史が，発展の姿において時代を区分しようという要請が強いために，安易に出来合いの基準を導入したり，史実に即しない構成を試みるという欠点を持ち易いことは既に見てきたところで明かであって，我々はこれらの点に就いて十分に慎重でなければならないが，だからと言って，時代区分の重要性を忘れてはならない。

これまでに書かれた東南アジア史の時代区分が，ヨーロッパ，中国，アメリカ，オーストラリア・ニュージーランド等の視点を基準としてとる傾向が強かったとすると，我々はこれらの中で，或はこれらを超えて，どのような区分によるべきであるかを答えなければならない。まず考えられることは，このようにいわば東南アジアの外から見ている把握の仕方ではなくて，東南アジアの内部からの自生的な立場で歴史を考え，時代区分を行うという方向である。[1] 確かにそれが大切であるが，具体的に

はどういうことであろうか。視角が違えば取りあげる史実も異って来るし，将来新しい視角から新しい事実を見出すことが出来ようが，現在の時点で我々が知り得る史実というのは，従来歴史家が取扱ってきたところと大部分は重なることになるので，実際問題としてはそれらの再評価と再構成の作業が中心となる。東南アジアの自生的な立場といっても，我々の目指すところは，より広く国際的にも承認されるような，より多く普遍性を持つような時代区分なのであって，学問的に東南アジアの人々に全く認められないというのは論外として，東南アジア以外には通用し難いというような区分であってはならない。ヨーロッパ中心の歴史観が東南アジアの国々に受入れられないのと同様に，東南アジアのナショナリズムが余りに排他的な歴史の見方を作り出す場合には，やはり域外の人々には承認されない。時代区分というのは最も基本的には人類の最古の時代と現在とを対比させて，歴史の変遷を考える基準を作り，具体的に問題とする国や民族の歴史の流れをこの基準との‘関係において’考察するべきものであろうが，[(2)] 東南アジア史の時代区分が，一層広く承認されるようなものとなるためには，このような基準との結びつきが，それと表明しなくとも，実質的に出来ているか，或は東南アジアの歴史事象が具体的に世界史的な関連を持っているかの何れかであろう。そして通史を書く際に，著者の立場が問題であるばかりでなく，歴史研究の進歩が社会科学・人文研究の巨視的に見れば普遍化に向っている思考形態と結びついて，特殊な歴史事実に限定されるべき歴史用語を離れて非歴史的な表現を用いる傾向を示している事実に注目しなければならない。このような諸点を念頭に置きながら，東南アジア史を時代区分する試みを進めて行くことが必要であろう。

私は曽て“東南アジア史の特質”と題して，時代的に変化する4つの特徴を数えたことがあり，[(3)] 今回その内容を繰返すことは省略するが，その後に補正すべき点が多く生じておりながら，大局から言えばこれらの特徴を本とした4つの時代区分を行うのがよいであろうと現在もなお考え

ているので，そのような区分が前に掲げてきた各種の区分とどういう関係になるかについて若干の説明を加えておきたい。時代区分は年代区分とは異るので，或る時代の特色が或る地点では年代的に早く，或る地点では遅く現れ，その年代的な差違が東南アジア史の場合などには著しく大きいことを注意しなければならないであろう。

(1) 東南アジア史を考える場合には“基層文化の形成”の時期をまず一つの時代として立てることが適当であると思われる。書き残された文献史料を用いない先史時代に属するもので，後代の文献からの推測，考古学・歴史民族学・言語学などの成果を利用して構成される時代であるが，その時代からの伝統は現在もなお強く生きている場合が多く，例えば先史時代に形成された民族や言語の区別が現代の政治に大きな役割を演じていることはよく人の知るところである。極めて古い生活形態を保持してきた民族が現在の大きな経済的・社会的変動の波に巻きこまれて消滅に瀕している現状を，歴史の流れの中で把握することは，現代の大きな課題でもあり歴史家の責任でもあろう。基層文化の問題はややもすると，序論の中で片付けられたりし勝ちであるが，この点では前に掲げたYaminの構想やインドネシア国史にみられる重点の置き方に注意を向けることが必要であろう。総じて19世紀以来の文献史学の伝統が変化して，第二次世界大戦以後に出版された概説書の類に，先史時代を大きく取り上げるものが多いのは，経済的な発展段階説に限られず，一般的な動向として認められることをも思い起すべきであろう。

(2) 第2は東南アジアの諸民族が各地に国家を形成して活動した“国家活動の時代”であるが，これは他の面からみると，インド文明・中国文明・イスラム文明というアジアに起った3つの大文明が次々に東南アジアに波及して，それ自身いろいろな変形を遂げながら，国家の形成と活動を促した時代である。東南アジアの歴史家がこの時代を重視するのは当然で，この地域が高度文化の影響を受けたというばかりでなく，独自の文化的な展開を示していることに注目しなければならない。そのよう

な国家活動の時代は大きな文明の流動という見地からも世界史的な関連の中に置かれる。この第二の時代を更に分けるとすれば，宗教的にも政治的にも大きな変動のある13世紀前後を境とすることができよう。この点Cadyの区分に賛成であるが，“近代への移行”という言葉は避けておきたい。ヨーロッパ諸国の人々が，また中国人，日本人も活動した16・17世紀の頃は東南アジア社会の基本的な性格は変らなかったものの，それ以前とは異った動きの見られる時期として区分することもできよう。

(3) 第3は西洋諸国の活動が優位に立つ時代で，その中心は19世紀，しかもその中葉以後であるが，西洋の勢力が貿易活動で優位に立ち，次いで領土の支配に向かい，植民地支配を行って顕著な植民地社会を構成する過程は，東南アジアの歴史としては従来全くなかった異質の時代であって，この変化の過程を一つの時代として，その開始期をオランダの領土支配の伸展する18世紀の後半に置くことは不自然でないであろう。世界史的な関連事項としては，この時代の初は産業革命の時代に結びつき植民地社会の顕著に展開する19世紀後半は列強の帝国主義の時代に相当するものである。

(4) 最後の第4の時代は東南アジア諸地域における新しいナショナリズムの展開と新しい独立国家の建設・発展の時代で，これについては諸書の間に殆んど差異が認められないが，時代の区分点としては，第二次世界大戦の一環として，日本が東南アジアを占領した時期から始めるのが適当であろう。前述のインドネシアの歴史では“日本時代とインドネシア共和国時代”という名称が用いられているが，短期間ながら外来の軍事的・政治的な勢力が，タイはしばらく別として，東南アジアの全域にわたり，それまでの西洋の国々以上に多くの外来人が一つの国から渡来したのは類例のない顕著な出来事であるから，これを区分点とするのは自然であろう。古く独立して活動していた東南アジアの諸民族が，欧米勢力の支配下を脱して昔の独立を回復したというだけの形でこの第4の時代を理解すべきでないことは明らかで，欧米勢力の優位の時代に東南アジ

アの社会が変質し，伝統は継承しながらも昔とは異った社会・文化の状態となっていることを明記しなければならない。そのことは例えば東南アジアの国々の国境が植民地時代の形勢をそのままに反映している一事からみても明らかであろう。

私の考える4つの時代区分と，この一文で紹介した各種の時代区分との相違点について，その詳細を論議することは，また別の機会に譲ることとしたい。前掲の諸書の考え方に，著者の属する国や民族や文化の色彩がよく現れているように，私の区分にも日本人として私の見解が現れているであろうが，東南アジア史に関してはそれぞれの研究者がより広く承認されるような時代区分の考え方を提出して，試行錯誤を重ねながらそれを練り上げて行かなければならないと思うので，私の見解も亦それに向っての一つの試みとして提出したものである。

注

(1) John Smail, "An Autonomous History of South-East Asia", *Journal Southeast Asian History*, Vol. 2, No. 2, pp. 72～102.

(2) 山本達郎，「時代区分の基準を立てる方法に就いて」『史学雑誌』63—1，1954. pp. 1～16.

(3) 山本達郎，「東南アジア史の特質」，山本達郎編『インド史』東京，山川出版社. 1960. pp. 492～502.

PERIODIZATION OF SOUTHEAST ASIAN HISTORY

≪Summary≫

Tatsuro Yamamoto

Different types of periodization have been adopted in the general histories of Southeast Asia published since the 1950s. However no consensus of opinion has been reached as to the criteria to be used for the classification of historical periods. Our aim of this article is to enumerate the forms of periodization used for the national histories of Southeast Asian countries and the general history of Southeast Asia and to try to make an approach to the formulation of a widely acceptable periodization.

If we compare the histories of the Netherlands Indies edited by F. W. Stapel (1938～40) and written by E. S. de Klerck (1938) and History of Nusantara by B. H. M. Vlekke (1943) with the proposed periodization of H. Muhammed Yamin (1957) and National History of Indonesia (1977), we find remarkable contrasts between the two groups: one representing the viewpoint of Netherland, the other representing that of Indonesia. The History of Vietnam published in Hanoi (1959, 1960) was constructed according to the Marxist theory of developmental stages, but it shows the impossibility of overall application of the theory to the historical reality of Vietnam.

Comparative study of general histories of Southeast Asia reveals also a similar kind of discrepancies among themselves. By and large, histories of this area written by (A) B. Harrison (1954), D. G. E. Hall (1955), (B) Wu Chün-ts'ai (1956), (C) J. F. Cady (1964), M. W. Mayer (1966), and (D) N. Tarling (1966) show us respectively the viewpoints of (A) Europe, (B) China, (C) United States and (D) Australia-New Zealand.

The author proposed the division into four periods for the future writing of Southeast Asian History: (1) Period of formulation of basic cultures of this area, (2) Period of prosperity of kingdoms of Southeast

Asian peoples together with the spread of Indian, Chinese and Islamic cultures, (3) Period of dominant activities of Western countries and their influences, beginning in the latter half of the eighteenth century, and (4) Period of development of nationalism and independent states since 1942.